

花ノ根の誰も口にはしなかったが、こんどの壮  
拳はゼンガクレンの八郎の計画だということにな  
った。滝の仁作は、犬井五郎助にいった。

「やるものであります、八郎は。ゼンガクレン  
だけのことはあります」

当惑する八郎にとつてもっと困ったことは、こ  
の雪隠こわしが若い衆たちの間に流行しはじ  
めたらしいことである。

次にやられたのは、かわいそうな小原恵吉の便  
所だった。恵吉のところがやられたのを聞くと、  
多山健吾は、その夜から寝もやらず雪隠の見張り

ちへの非難は高まり続けるに違いない。

雪隠こわしに先鞭をつけた若者たちが、こんど  
は夜回りを始めなければならなくなった。すると、  
同時に事件は起こらなくなった。

若者たちの中に誰か犯人がいるのではないか。  
そうとしか考えられないので、若者たちはお互い  
に仲間を疑うハメに陥った。

フォークダンスとコーラスの会に集まる人数が  
目立って減りはじめた。道で出会った者を八郎が  
誘っても

を始めた。二、三夜たためうちに健吾がげっそり  
とやつれてしまったのはいうまでもない。

次は木戸ゆいの雪隠。続いて中村ソノのそれ。  
ソノの二人の娘は八郎に

「あんまりであります」  
と涙ぐんで抗議した。

ついに八郎は、若者たちに中止を提案した。よ  
うやく花ノ根にも批判する声が出はじめていた。

ところが、奇怪なことに、庄平の便所以外、若者  
たちは手を下していないのである。では誰がやつ  
たのであるか。真犯人をつかまえるまでは若者た

「昼間、田の草とりをすると疲れるのでありま  
す」  
といったはかばかしくない返事がかえってきた。

三野正平は密かにニヤリとした。決して自分に  
逆らうことはないと考えていた小原恵吉が自分  
の前で笑ったことにカッとして、恵吉の家の便所  
をこわしてやったことが、結果的に反抗化してい  
た若者たちの力をつぶすことにつながったから  
だ。

あとの犯人は庄平も知らない。しかし、木戸ゆ  
いの家をやったのは彼女の強欲さに腹をたててい

る誰か、中村ソノの家をこわしたのは、娘に振られた誰か、もしくは案外おゆい後家であったかも知れない。このていどには想像できよう。

もう一つ手を打てば、八郎を完全に若者たちから孤立させることができる。

それから間もなく、またもや一夜のうちに二本松の藤人と初瀬徳左右衛門の雪隠が引っくり返された。これまでもずっと若者に同調する場にした徳左右衛門が、これで若者たちからすっかり離れた。

らである。八郎がゼンガクレンであるという噂を流したのは、実は庄平自身であった。

「八郎が、この花ノ根村の淳朴な若い衆たちをいかに悪者に育てることができるかは、こんどのことでああなたにもよく理解できたことと考えるものであります。若い衆を善導するのは、我々、良識をもつてこの花ノ根をとりしきつてきた人間にほかなりません。八郎が若い衆たちを味方につけたのはフォークダンスとコーラスの会でありましたが、私たちは、ここで盆踊りを始めよ

二本松の藤人は何もいわなかった。

庄平はみずから徳左右衛門を訪れて説いたものだ。

「あなたは若いつもりでいても、若い衆たちはあなたを若い仲間だと考えてはいなかったということであります。とくに八郎のようなゼンガクレンの目から見れば、あなたも貧乏人をいじめる分限者の一人にすぎないのであります」

庄平は、このとき初めて八郎をゼンガクレンと呼んだ。そう呼んでも抵抗のない情勢ができたか

うと思うのであります」

その費用の一部を負担してほしいのであると、

庄平は徳左右衛門にいった。そういえば新暦の盆が近づいていた。

「私は、あのような憎たらしい若者たちに一銭の金も出してやる気などありません」

と徳左右衛門はいったが、

「若い衆たちが悪いと考えるのは悪い考えであります。悪いのは、悪いことをさせた八郎だけなのに、若い衆全部を悪いと考えるのはよくな

いのであります」

庄平は、藤八にも盆踊りの費用を分担させようとした。しかし藤八は首をタテに振らなかつた。彼はすでに花ノ根のために、大きな出費を済ませていたのである。

初瀬徳左右衛門が藤八の分まで出すことで盆踊りの計画は実行に移されることになる。

徳左右衛門に庄平は、次期の村会議員には必ず徳左右衛門を推すことを約束したのであつた。もちろん、こうした密会が若者たちに知らされることはなかつた。

りは舞踊としては何の変哲もないありふれたものであつた。女たちが囃子の櫓を中に内側で輪になつて踊る。男たちはその外側を踊りながらまわる。

老人たちがニタニタ笑いととも話題にしたのは、この踊りの途中、娘と連れだつて木陰にひそみこむ愉しみがあつたということである。めあての娘の袖をちよいと引く。娘の方にもその気があれば若者の後ろについて暗がりへ姿をかくす。そのあと、どういうことになつたかは、二人と神さ

盂蘭盆会の行事はこの地方ではたいい旧暦

に行なわれる。新暦の盆のころからけいこにはいれば、野良仕事も一段落する旧盆には、一応踊りのていさいも整うであろうということである。たとえ、けいこが不十分で踊りはへたくそきわまるものになろうと、庄平たちには何でもない。フォークダンスよりも盆踊りの方に若者たちの関心が向いてくればそれでいいのである。

花ノ根に盆踊りが復活するということは、まず老人たちの間から話題にのぼつた。花ノ根の盆踊

ま仏さまだけが知っていることである。

「娘であると思ひこんで袖を引きましたら何とどこやらの女房どのでありまして、手ひどい失敗であるその後悔の限りを尽くしていましたら、何と女房どの方から誘つてくれたりしたものであります」

若者たちの気が動かぬはずがなかつた。おまけに、けいこに出かけてきた者には、酒と肴がふんだんに出るとあつては、フォークダンスの会に出るよりは盆踊りのけいこに出る方が多くなつたの

は当然すぎる当然であった。

犬井八郎は、この盆踊りの提唱がどのような意図のもとに発案されてきたかを悟り、口をすっぱくして参加しないよう説得したが、八郎の娘たちからの圧倒的な人気に嫉妬を感じる若者は多かったし、八郎がカワラ木の製材工場主から婿と望まれていることにいたたまれない思いを禁じ得ない娘も少なくなかったのである。八郎の説得に耳をかさないことで、何となく自分の劣等感を解消する。

ら、庄平たちとしては対抗上、当初、産土神社の境内を考えたのであったが、オタユウサンは頑として承知しなかった。初太郎宮司にとっては、村の風紀を乱すが故に長らく禁止されていた盆踊りを、いまさら何をもって復活させねばならないのかわからなかったし、そのことに生理的な嫌悪感と憤りを覚えたものだ。初太郎は花ノ根の娘たちを身の危険から守るために、深く重大な決意をしたのである。

オタユウサンは盆踊りのけいこがたけなわにな

そのうえ、徳左右衛門の涙ぐましい出費によって、けいこ始めの日には飲み放題、食い放題のパティーをやるうというのだから、その夜は花ノ根の住人は全部集まった。

八郎ですら無視できずに出かけていった。もちろん八郎は敵情偵察という意味である。場所は神宮寺の庭。仏教革命の日のために、オジュッサンは庄平たちの計画にもはなはだ協力的であったのだ。

フオークダンスの会が神宮寺の大広間だったか  
と、櫂の六尺棒を手に、人目のつかぬ物かげを見回りはじめた。怪しい人影を見かけると持ち前の大声を發して

「お前は誰でありますか」

と怒鳴る。

答えもせず逃げもせず、息をひそめる者へは容赦なく六尺棒を振りおろす非情さを示した。時として初太郎の六尺棒の犠牲になるのは子持ち地蔵尊であったりしたが、古神道の信奉者である宮司には毛で突いたほどの良心の苛責もなかつ

た。

暗闇の魅力というものは若者たちにとって抜きがたく、盆踊りの本番が終るまで、八郎のフォークダンスとコーラスの会は再開されようもなさそうであった。

いよいよあすから盆踊りが始まるという夜、産土神社に夜討ちがかけられ、拝殿に汚物が撒きちらされた。幸か不幸か、初太郎の家には庭先に孤立した雪隠がなかったのである。

スサノヲノミコトのように憤怒の極に達したオタクウサンは、八郎のところへ猛烈にねじこん

だ。

いかに嚴重な抗議を受けようと、八郎のどうしようもない事件であった。第一、若者たちがやつたのだという証拠さえどこにもないのである。  
(以上9月17日放送分)